乳牛導入130周年記念酪農シンポジウム

100年続く酪農郷を目指して

乳牛導入１３０周年記念酪農シンポジウム（葛巻町乳牛導入１３０周年記念事業実行委員会主催）が11月15日、まき×まきホールで開催されました。酪農家や関係者ら約１２０人が、記念講演や事例発表を通じて町の酪農の発展に思いをひとつにしました。

明治25年、遠藤福一郎氏（旧葛巻村新町）が東京や横浜からエアシャー種、ホルスタイン種などの乳牛を導入したのが町の酪農の始まりと言われています。昭和50年代には、北上山系開発事業や葛巻町畜産開発公社の設立などにより町の酪農は飛躍的に発展し、乳牛の飼養頭数、生乳生産量共に東北一を誇る基幹産業として発展し続けてきました。

シンポジウムの開会にあたり鈴木重男町長は「町の酪農関連産業は一次産業から二次産業、三次産業へと拡大してきました。平成26年に策定した『新葛巻型酪農構想』に基づき、効率的かつ合理的な生産と生乳の高付加価値化を図り、１００年先まで持続する酪農郷を目指します」とあいさつしました。

あいさつを述べる鈴木町長（円内）と参加者の皆さん

講演や事例発表で思いや課題を共有

記念講演では「岩手葛巻と共に歩んで」と題し、タカナシ乳業㈱の高梨信芳代表取締役社長が登壇しました。高梨社長は、創業者である祖父（高梨芳郎氏）について「昭和初期に、祖父は良質な乳牛を求めて岩手に通っていた。南部牛追い唄を唄いながら、岩手で良い牛と温かい人々に出会ったことを話してくれた」と思い出を語り、さらに「岩手工場は町の多大な支援で誕生した。製品は日本を代表する低温殺菌牛乳に成長しており、これからも町の皆さんとともに、産地にこだわった製品を消費者に提供していきたい」と話していました。

高梨信芳
代表取締役社長

関根工取締役

正木智大
岩手工場長

高梨社長に引き続き、関根工取締役と正木智大岩手工場長が、全国各地の工場で展開する事業や岩手工場の現状などを紹介し、参加者は町の酪農を支える企業への理解を深めていました。

その後、町の酪農の担い手による事例発表が行われ（次ページ参照）、参加者は発表者の多様な取り組みに触れ、その思いや課題を共有していました。

シンポジウム閉会後はグリーンテージで交流会が開催され、さまざまな立場の参加者が情報交換をし、町の酪農のさらなる発展に思いを一つにしました。

事例発表

経営規模を拡大、共同体も視野に

酪農家　辰柳勝之さん（栗山）

町や関係機関の支援を受けて、100頭牛舎を導入し増頭で経営規模を拡大しています。酪農を取り巻く情勢は厳しいですが、生産量を上げることで対応していこうと思っています。搾乳だけではなく農地集約など効率よく粗飼料生産を進めることも同時に考えていかなければなりません。個人の力には限界があり、今後は機械の導入などは共同体で取り組むことも視野に入れています。

女性酪農家の視点で地域を活性化

プエラリエ・ワンズ会長　村澤真澄さん（山岸）

「プエラリエ・ワンズ」は県の牛飼い女子応援事業などの支援を受け平成28年に立ち上げたグループです。町外から嫁いだ女性も多く、子どもも一緒に参加できる研修や交流会で、仲間づくりや情報交換の場を作っています。牧草ロールアートラリーのように、女性の視点で産地をＰＲしながら、今後も酪農、畜産業の発展と地域の活性化につながるような活動を続けていきたいです。

人材を育て、長く農家を支えたい

葛巻町酪農ヘルパー利用組合　木戸場真紀子さん（江刈）

農家も定期的に休を休め、自分や家族との時間をしっかり取ることが重要視されている今日、より多くの酪農ヘルパーが求められています。組合では、農業高校を訪問したり町の移住や雇用促進の事業などに積極的に参加して、職業としての認知度を向上させようとＰＲに力を入れています。人材を確保し、育て、今後も長く町の酪農家を支えられるよう頑張っていきます。

北海道の先進事例に学ぶ

10月24日から26日までの3日間、乳牛導入１３０周年記念事業として酪農経営技術視察研修が実施され、若手酪農家や関係機関の職員など9人が北海道上士幌町などを訪問しました。

研修視察では、５戸の酪農家が統合して設立した農業法人㈱サンクローバーの1千頭規模の酪農経営や、集中型バイオガスプラントで町全体の家畜ふん尿を一括受け入れしている㈱上士幌町資源循環センターなど、酪農分野で先駆的な取り組みをする農家や法人などを視察。１００年先へ続く町の酪農の形を先進地から学びました。

㈱サンクローバーの経営者から説明を受ける参加者と牛舎の視察